

355 腹腔鏡併用腔式子宮全摘術の子宮摘出方法に与える影響

石川県立中央病院

西川有紀子, 干場 勉, 西本秀明, 朝本明弘, 矢吹朗彦

〔目的〕子宮全摘術には腹式(AT)と腔式(VT)のふたつの方法がある。VTが選択され存在している意義や理由は、その方法が患者への侵襲、感染、癒着などが少ない利点があるからであるが、やや盲目的となる点が嫌われ、適応を狭めている。しかし、近年その欠点は腹腔鏡を用いることで克服されつつある。当院で試みられた腹腔鏡併用腔式子宮全摘術(LAVH)症例を検討し、その子宮摘出方法に与える影響を考察した。

〔方法〕当院でのLAVHの適応は妊娠18週相当の大きさまでの良性子宮疾患、それ以下でも頸部筋腫や強度癒着例は適応外とした。1996年10月から開始し1997年9月までに行われた54例のLAVH症例について出血量、手術時間、子宮重量、患者背景、術中所見、術後入院日数などを検討した。

〔成績〕平均出血量、手術時間、子宮重量は各々135ml, 144分, 198gであった。患者背景で従来ATの適応であった症例は帝王切開既往7例、開腹手術歴11例、子宮内膜症合併8例、卵巣腫瘍合併8例、未妊婦3例、未産婦10例、未婚婦人1例であった。術後入院はATの約半分の約1週間で回復は良好、腹腔鏡による合併症はなかった。術前診察でVT可能と思われる症例でも癒着などでVTでは観察不十分となると思われる症例が存在するとは逆に、かなりの癒着が存在するにもかかわらずLAVH可能症例が存在しAT移行例はなかった。

〔結論〕VTが困難と思われる症例でも結局は腹腔内を観察して見ないと分からないこと、技術面が改善されれば大きさによる適応なども克服し得るであろうことから、腹腔鏡を用いることによりほとんどの子宮摘出の必要な症例はVTの恩恵を受けることが可能になると考えられた。

356 サイクリンGによるG2/M期の制御

九大・生医研

清水 篤, 西田純一, 加藤聖子, 八谷俊朗, 和氣徳夫

〔目的〕細胞周期の調節は各々の周期に特異的なサイクリンによって行われている。その中でサイクリンGはp53により転写が活性化される。しかしその機能は不明である。本研究ではサイクリンGによる細胞周期調節能を解析した。

〔方法〕1) ラット胎芽線維芽細胞(REF), Rat1a細胞を用いた。2) 0.02-0.2 μ M ドキソルビシン(DOX), 5mM 酪酸ナトリウム(NaB)処理後、細胞周期の変化、p53, サイクリンG, p21の発現を解析した。3) サイクリンGに対するアンチセンスオリゴヌクレオチド(AS)を添加し細胞周期調節に与える影響を観察した。

〔成績〕1) DOX, NaBによりp53蛋白及びp21 mRNAの増大が観察された。2) DOX処理により各細胞はサイクリンG発現量を増大し、それに伴うG2/M期集積を濃度依存性に示した。3) NaBはサイクリンG発現量を増大しなかった。細胞はG1期に集積し、S期及びG2/M期細胞は相対的に減少した。4) 0.02 μ M DOX処理に伴う細胞のG2/M期集積はAS投与によりコントロールレベルにまで抑制された。0.1 μ M DOX処理によりG2/M期集積とsubG1期細胞の出現が観察され、共にASにより抑制された。

〔結論〕1) サイクリンG発現の誘導に伴い、細胞はG2/M期に集積する。この機能はASにより特異的に抑制されたため、サイクリンGはG2/M期移行を調節していることが示唆された。2) ASにより0.1 μ M DOX処理に伴う細胞のG2/M期集積及びsubG1期細胞の出現が回避されたことから、サイクリンG或いはG2期停止がDOXによるアポトーシスの誘導に関与していることが示唆された。